



追憶
の
恋人

いつも見る夢だった。

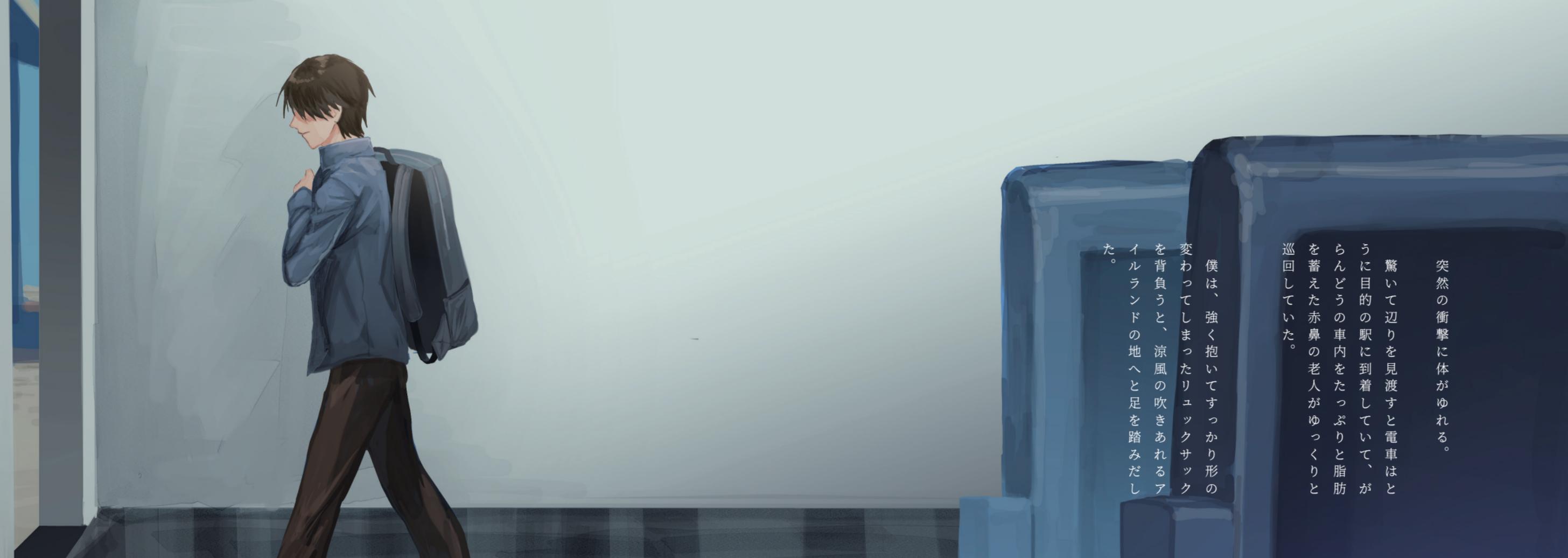
夜とも朝ともつかない曇天の空の下、荒野の真ん中に小さな人影がぼつりと浮かんでいる。

影は少女の輪郭線をかたどっていて、すらりとのびた白い四肢と、たなびく黒髪をなぞる指先の形にはどうにも見覚えがあった。けれど荒野の中に鮮明に浮かびあがる彼女のシルエットとはうってかわって、彼女のことを思い出そうとするとピントがずれたように何も思い出すことができない。

ふと、少女がこちらを振り返る。まるで思い出すな、とでも言いたいのか、彼女の顔は黒いマーカーでぐちゃぐちゃに塗りつぶされている。

はくり、と彼女の柔らかな唇が開かれた。ような気がした。

「私を愛さないで」

A young man with dark hair, wearing a blue jacket and dark pants, is walking from left to right. He has a large backpack on his back. The background is a light blue, hazy environment, possibly a train station platform. To the right, there are dark blue rectangular structures, likely train seats or pillars. The overall mood is quiet and somewhat somber.

突然の衝撃に体がゆれる。

驚いて辺りを見渡すと電車はとうに目的の駅に到着していて、がらんどうの車内をたっぷりと脂肪を蓄えた赤鼻の老人がゆっくと巡回していた。

僕は、強く抱いてすっかり形が変わってしまったリュックサックを背負うと、涼風の吹きあれるアイルランドの地へと足を踏みだした。



「アイルランドに行かないか」

はじまりは、父さんの突拍子もない一言だった。

どうしてアイルランドなのかと問うと、父さんは「どうも、こいつがお前に会いたいらしくてな」と言っただけの一枚の写真を見せてきた。写真にはどこまでも続きそうな草原と放牧されている羊が写し出されていて、その傍らでガタイのいい白人の男が誇ったような顔でサムズアップを決めている。どうやらその男は父さんの古くからの友人で、どういうわけか息子である僕に興味を持ったのだという。

気分転換もかねてどうだ、という父の言葉に、どうせやることもなかった僕は言葉もなくうなずいたのだった。



色とりどりの花や看板で彩られた通りを歩いていく。

どうやらこの通りは飲み屋街らしく、時刻はまだ昼下がりであるにもかかわらず多くの人間が店先で黒ビールをあおっていた。ジョッキを飲み干した男は満足そうな声をあげ、泡のついた口ひげを気にも留めずに次の一杯を店員に注文した。談笑する女たちは赤くハリのよい唇を懸命に動かしながらナッツをつまんでいる。

心底、幸せそうだ。

空を見上げると、日本と対して変わらない雲が空一面を覆っている。だのに、この国の人々の足元に落とされた影はなによりも軽やかな色をしていた。自分の足元にまわりつく重たい影に向かって、ため息を一つ吐いてみる。影はどこへとも消えてくれなかった。

待ち合わせ場所である喫茶店につくと、店の奥に縮こまるようにして座っていた大男がこちらへ手を振っているのが見えた。

「やあ若造、はじめましてだ」

ロイと名乗った男は硬く分厚い手のひらで挨拶をかわすと、にっかりとした笑顔を浮かべて飲みかけのビールを飲み干した。テーブルの上には随分と待ったのか、いくつもの皿と手のつけられていないビールが温くなって載っかっている。

「すみません、待たせたようで」

「気にすんな。ここにはいい女と
いいケツが揃ってる、見飽きるこ
とはないさ」

がははと口ひげを揺らして大きく笑うロイの様子は、さながらファンタジー小説に出てくるドワーフのように逞しい。だが彼の口から放たれる英語は日本人の僕でも比較的聞き取りやすい発音とスピードに抑えられていて、彼の細やかな性格をうかがわせた。「お前の親父から話はきいてるよ。まあ、ゆっくり休んでいくといい」

「……ありがとうございます」

ロイはゆっくり深く頷いて、残されていたフィッシュ&チップスの一欠片を口に放り込んだ。

石垣に縁どられた小道を車が滑ってゆく。車窓の奥には延々と草原の海がひろがっており、その中にレンガ造りの古びた民家がぼつりぼつりと建っているのがみえた。

「いいところだろ。街で酒を飲むのもいいが、草原を散策するのも醍醐味ってもんだ」

やー、と口の中で音を転がす。

この国に足を踏み入れてからずっと続く倦怠感のようなものが、よりいっそう自分の喉元に迫ってきているのがわかってしまった。横目で眺めたロイの表情が街の人々となんら変わりのない、満足げな表情だったからだろうか。羨ましいだとか、妬ましいだとか、ひりつく感情さえも僕の胸の中になんかこえないのは、どうしてだろう。

助手席の窓が少し開かれる。頬を鋭くなでていく風にのって、草原の青いにおいが鼻先をかすめていった。

僕は少し、目を閉じた。

「おい坊主。散歩に出かけるのはいいが、夜になったら森には入るなよ」

ロイの家に通されたあと、ふと外に出てみようかと考えていると、ロイが妙に厳しい声色で忠告してきた。

「お前みたいな若造は信じないかもしれないが、この国にはまだ隣人が多く棲んでいるんだ。夜の森はとりわけ隣人たちが姿を現す時間帯だから気を付けろ」

隣人」という言葉に首をひねりつつも、僕は「わかった」と応えて外に出た。

延々と、延々と石垣が続く。

横目に見える草原は落ちた日の赤色を吸い上げて黄金色に輝きはじめ、寝ていた羊たちは賢い犬に追い立てられながら唸りをあげて走り去っていく。揺れる毛もまた夕陽を吸い上げては金色にきらめいていて、どこか幻想的だ。

一步を踏み出した足はとまることなく、石垣に沿って歩を進めていた。太陽に背を向け、濃紺のヴェールに包まれた夜に向かって歩いていく気分だった。石垣に縁どられた小道は、針葉樹の木立に向かってまだまだ伸ばされている。

「あら、イイ男」

その時、視界の端にふわりと黒髪が流れた。



「胸に美味しそうな空虚を抱えている。いいわね、いい。そういうヒトほど美しい言葉を紡いでくれるんだって」

声のしたほうを振り向いてみると、異国のだよかな風景にはあまりにも似つかわしくないセーラー服姿の少女が、いたずらっぽい笑みを浮かべて立っていた。その顔には何故だか既視感があったのだが、その正体を探ろうとすればするほど、喉元までせりあがっていた倦怠感が腹の底にたまっては痛みに代わっていく。

「綺麗な服。それに、何だか懐かしいな」

少女は、くるくると何度も回ってはスカートの広がる様子を楽しみはじめた。

「……誰」

腹の底にたまった痛みを吐き出したくて、僕は大きな息を含ませて呟いた。

「忘れちゃったんだね。こんなにも鮮明に映しだしてくれたっていうのに、君ってば非情なヒト」

赤く滲んだ瞳を弓なりに歪ませ、少女は笑う。

「よく言うでしょ、隣人を愛せよって。ご高名な方のお言葉だとか。その言葉にのづとるのなら、君も私を愛してくれたっていいじゃない？」

彼女の隣人という言葉に僕はハッと顔をあげた。後ろを振り返ると、何処までも続いていくと思っていた小道は真っ暗な針葉樹林に飲み込まれていて、気づけば、僕はその木陰に足を一步踏み入れてしまっていた。

隣人には気をつける、というロイの言葉が頭の中にこだましている。しかしどうしてか、僕の足はこの場から逃げ出そうとしてくれない。足が影に縫いとめられてしまったみたいに、動いてくれないのだ。



「リヤナン・シー。よろしくね、愛しい人」

「怖がらないで、愛しい人。君はただ、私の愛を受け入れてくれたらいいの。私だったら、君の心に巣くう穴を埋めてあげられる。忘れてしまった私の顔だって、鮮明に思い出させてあげられる。……君だって知りたいでしょう？ どうしてこんなにも、毎日が空虚に思えるのかって」

するり、と白い腕が僕の首をか
らめとる。彼女の赤い瞳が月明か
りの下ゆらめいて、僕を引きこん
で離さない。眉尻を下げて困った
ように笑うその表情は、痛いほど
に見覚えがある。けれど僕はそれ
を思い出すことができないでい
る。それがもどかしくて、苦しく
て、どうしようもなく胸が痛かつ
た。

「君の、名前は」

絞り出した声は震えていた。



「ねえ！みて、おっきな入道雲！」
嬉しそうな声が夏空に弾む。見慣れた田園風景を生ぬるい風がなでいて、僕は何故だかわからないけれど、甘やかな喜びが胸を満たしていくのを感じていた。

終業式が終わり、これから長くて短い夏が始まる。そんな日に、僕と彼女はふたりつきりで、ただただ田んぼのあぜ道を散策していた。とりわけ何を話すでもなく、時折顔をのぞかせる蛙であるとか、道端に生えた野草だとかを眺めては顔を合わせて微笑み合うような、そんなゆったりとした時間が僕たちの間には流れていた。

空を見上げると、青空を押し上げるようにして立派な入道雲がち昇っていた。

彼女はそんな空を見上げながら、真っ白に輝くセーラー服をはためかせて無邪気にはしゃいでいる。

——ああ、幸せだ。心の底から。

当時の僕は、その幸せが当たり前が続くと思っていた。思ってしまった。

踏切の音が耳をつんざく。伸ばした手は何もつかみきれず、空を切った。

制服が変わって、少し大人びた表情をするようになった彼女がこちらを振り向く。相変わらず顔は黒く塗りつぶされたまま。

待って、行かないで。震えた喉で必死に叫ぶ。踏切がゆっくりと降ろされていった。

塗りつぶされた彼女の顔が、少し歪んだ気がした。そしてぽっかりと穴が開いたかと思うと、一言。

「私を忘れてね」

彼女の言葉が、電車の轟音にかき消されていく。

置き去りにされた彼女の影の中で、真っ赤な瞳が揺らめいた気がした。

「……ず、坊主！ しっかりしろ！」

身体を強く揺さぶられて、目を覚ます。見上げた先には酷く引きつったロイの顔と、心配そうにこちらをのぞき込む幾人かの老人の姿があった。

「夜は気をつけろと言ったろう！ シアーシャが見つけてくれたからよかったものの、ここいらは治安がいいとも限らないんだ」

ロイは怒りと安堵がないまぜになったため息を吐きつつ、アイランド訛りの英語を早口でまくしたてた。

どうやら僕は、散策に出掛けたあと数時間ほど行方不明になっていたらしい。ロイは忠告していた夜になっても帰ってこない僕を心配して、近隣の住民に声をかけて辺りを探しまわってくれたのだという。結局、僕はロイの家から遠く離れた場所に位置する針葉樹林の中で倒れているのを発見された。

「東洋人の観光客は悪い奴らのいいカモなんだ。今回は何事もなかったからよかったものの、一人で出歩くときは気をつけなさい」

大人が子供をたしなめるように、ロイは低くゆっくりとした英語で僕に言って聞かせた。僕の肩に置かれたロイの手はとても大きくて、分厚くて、温かかった。

ぞろぞろと連れ立って、ロイの家へと歩く。僕の事を一緒に探してくれた近隣の人々も、ああよかった、隣人に連れていかれなくて良かったと口々にこぼしていた。

隣人。

道端で出会った少女の事を思うかべる。姿かたちは鮮明に思い出すことができたのに、何故だか、彼女の顔だけがはっきりと思い出すことができなかった。

「ねえ、あなた」

僕の少し後ろで古びたランプを灯しながら歩いていた老婆が、ひっそりと耳打ちをしてきた。僕が少し身をかがませると、彼女は枯れた細い指で僕の首筋をつうつと撫でてくる。びっくりして思わず一歩後ずさると、やけに複雑な顔をした老婆と目が合ってしまった。



「あなた、隣人の愛をうけたのね。それも、熱烈な愛を」

冷たい汗が背筋をはって流れていく。

「隣人に愛を返すかは、あなたの自由よ。……でも気を付けて頂戴ね。彼らは祝福も、災厄をももたらすのだから」

老婆はそう言い残すと、他の人間に軽く挨拶をかわして自分の家へと帰って行ってしまった。

わからない事だらけだ。隣人やらの事も、彼女の事も。けれど僕の頭の中は妙にハッキリとしていて、現実味のなかったアイルランドの土の感触が、鮮明に足裏に刻まれはじめていた。



部屋に戻ると、暇つぶしように
とロイが用意してくれていたアイ
ランド詩人の作品集が机の上に
開かれていた。
簡潔な英語でまとめられたそれ
は、やけに僕の目について離れて
くれない。

ページを一枚めくり、インクの
滲んだ文字列に目を滑らせる。一
枚、また一枚、ページをめくる。
老婆の指先が触れた首筋がやけに
熱く感じる。首筋だけではない。
心臓が高鳴り、鼓動ははやまり、
古びたページをめくる指先にさえ
も熱がこもり始めていた。文字の
奥に込められた情景描写が、人々
の息遣いが、自分の中で鮮烈に再
生されていく。

胸の内ですっとわだかまり続け
ていた空虚感は、いつの間にか何
処かへ消えていた。

代わりにあるのは、溢れ出る言
葉の数々。

わからない事ばかりだ。わから
ない事ばかりだったが、言葉にす
ればいい。それだけはなんとなく
理解していた。



ベッドの上に投げ捨てられていたリュックサックから、当分使うこともないと思っていた筆箱とノートを取り出す。

窓の外、空は既に白みはじめている。
僕は筆をとった。

リヤナン・シー。妖精の恋人とも呼ばれる彼女に愛された男たちは、詩の才能と引き換えに徐々に命を吸われていく。かつてアイルランドで彼女たちに愛された詩人曰く、リヤナン・シーの愛は、言葉の形をしているらしい。

けれど一つだけ、私の胸にひっかかるものがあつた。日本から来たという青年を愛したリヤナン・シーは、この近辺で言い伝えられるリヤナン・シーの姿とはまるっきり異なっていた。それに、去り際のあの表情。

彼の頭を愛おしそうに抱いて、さも、逃さないと言うかのような――。

忘れてね、という過去の自分の
言葉をこれほど悔いたことはな
い。

愛さないでほしい。忘れてほし
い。こんなに汚い自分のことなん
て、無かったことにしてほしい。
ずっとずっとそう思っていた。

あの夏の日、入道雲を見上げる
君の横顔が綺麗だったから。父さ
んの腹の下で小さくうずくまっ
て、漏れ出る嗚咽を抑えること
しか出来なかった私なんかより、
よっぽど綺麗な姿をしていたか
ら。

でも、もう、離さない。私の事
を忘れていたっていい。思い出し
てくれなくてもいい。

ただ私の愛のカタチを受け入れて。
離してあげないんだから



「追憶の恋人」

絵・文 Heme